



栃尾織物の祖を祀る「貴渡神社」は、 越後のミケランジェロ「石川雲蝶」の宝物！

栃尾観光ボランティアガイド 大崎 勉

日本の文化・芸術分野の継承は、パトロンやスポンサーの応援があつたれば「こそ」が歴史を刻み続けることを可能にしているように思います。長岡市栃尾地域・栃尾の「貴渡神社」は、「越後のミケランジェロ（石川雲蝶）」が彫刻した市指定有形文化財です。嘉永元（1848）年に創建された神社は、地域の産業おこし「編織」の製造を实践した庄屋・植村角左衛門が、その業績を讃えて祀られています。「上杉謙信、直江兼続」の歴史物語から、ノミ・カンナは「もしかして、与板打刃物かもしれません！」

編集人

「リバーバンク・レポート」
平成28年6月1日 第14号

長岡市栃尾（旧栃尾市）にある「貴渡（たかのり）神社」

は、かつては「機神様」とも呼ばれており、昔は織物の関係者や機を織る織子さん達の参拝が絶えなかったということ。その理由は、養蚕を奨励し「編織（しまつむぎ）」を開発し、栃尾郷の織物を産業として振興する基礎を築いた庄屋・植村角左衛門貴渡翁の霊を祀っているからです。この貴渡神社は、嘉永元（1848）年に建立され、当初は植村家の私社でありましたが、明治42（1909）年に当時の栃尾村の管理となりました。

にあたり、村々に産業があればこのような窮状にならないのではないかと考え、以後、郷民に養蚕と機織を奨励し、自らも妻とともに織りの技術向上と染料の開発に工夫して、遂に編織の完成をみたこと。この頃、荷頃村に大崎オヨがおり、父親の山伏・光明院が十日町付近から持ち帰った編織に創意工夫と改良を加えて、角左衛門とは別にこれまでにない編織を織っていたようです。角左衛門は、このオヨのことを聞き、その技術を妻に伝習させたといわれています。そしてオヨの技術導入と一段と改良を加えた結果、紬は栃尾郷の特産品となったのです。

6（1809）年頃には1万疋（1疋は2反）に達し、嘉永年間（1848〜53年）には3万疋に達したといえます。角左衛門は、文政4（1821）年に84歳で没、没後27年の紬生産がピークになる頃に植村家が神社を建立、角左衛門は神号「貴渡」と称して「貴渡神社」に神として祀られているのです。そしてこの貴渡神社には、今人々



写真提供：かざせん株 草木染織工房 露石庵

に注目される彫刻があります。貴渡翁の由来・業績にふさわしく、桑摘みして蚕を飼い、繭を煮て糸を紡いで、機織りまでの工程を唐の風俗で浮き彫りで描いています。そこには、童子や猫も配してのどかな生活がにじみ出ています。その他にも、正面向拝には神社を守護する龍、その左右に獅子鼻と象鼻、長押（なげし）の墓股（かえるまた）には十二支と神社全体がすばらしい彫刻で埋めつくされており、一角の左隅に「彫工 石川安兵衛 源雲蝶」「嘉永元申」「雲蝶之印」と大きく自信たっぷりな

銘があります。これこそ今、越後のミケランジェロと称される石川雲蝶です。雲蝶は、文化11（1814）年江戸の雑司ヶ谷で生まれました。本名は安兵衛、若くして江戸彫石川流の彫物師として名を挙げ、20代で幕府御用勤めとなり「石川安兵衛 源雲蝶」を名乗りました。江戸での製作記録は確認できていませんが、当時の時代背景として、網紀肅正、儉約奨励を旨に天保12（1841）年から天保14（1843）年に行われた天保の改革によって、祭り、文化、生活などの

さまざまな面が規制され、職人の仕事も制約を受け、雲蝶等彫物師の仕事も江戸では激減したのではないかと考えられます。そのような折、三条の法華宗総本山本成寺の檀家総代の金物商・内山又造が江戸で雲蝶を訪ね、三条に来て本成寺の欄間などの彫刻を依頼したという話が伝わっています。その後越後に入り本成寺の彫刻を行うことになりましたが、何時越後に入ったかは明確な記録はありません。30歳前後に二度にわたって越後に入り、越後で彫刻師として落ち着いたようです。貴渡

神社の彫刻が完成したのは1848年34歳の時ですが、貴渡神社の彫刻が魚沼方面の作品に比べ、早い時期・若い頃の作品であることが分かります。雲蝶はその後、三条四ノ町の酒井弥助に見込まれて、酒井家の婿養子となり、妻くにとの間に長女なみ、長男儀平がいました。明治16（1883）年に69歳で亡くなるまで、三条、栃尾、そして魚沼方面に多くの作品を残しました。一昨年は生誕200周年、今、雲蝶作品は人々を魅了しています。▽長岡市栃尾宮沢在住

